

レース活動など

《小網代フリートレース》

小網代ヨットクラブが誇るべき伝統のクラブレースで、毎月一回開催されている。1976年6月に第一回レースが行われ、以後中断されることなく昨年の12月で40年を超え484回を数えた。おそらく毎月継続されている日本でも最も古いレースである。当初は参加料がダルマワイスキーネ一本で、すべて優勝艇に与えられ、帰港後、優勝艇に参加艇が横付けして賞品授与と酒盛りが行われた。このため、このフリートレースをウィスキーレースと呼ぶ人もいる。毎年5月と10月には午前0時スタートの反時計回りの初島レースが組み込まれ(現在は5月のみとなつたが)、オーシャンレースの基礎トレーニングにもなっている。

《小網代カップレース》

毎年11月上旬に小網代ヨットクラブが主催する小網代カップレースが開催されている。小網代沖スタート、フィニッシュで大島を時計回りに回航する68海里のレースで、毎年最後の島回りの外洋レースとして定着している。第一回は1963年に開催され【さがみⅡ】が優勝し、代々受け継がれる事となつた立派な銀杯が授与された。

2015年で第52回を数える伝統のレースとなつていて。

《“チーム小網代”ハワイ遠征》

2001年、「チーム小網代」を結成しワイキキ沖で行われたAsahi Super Cupに参戦、続いて2004年にも第2回ハワイ遠征を行つた。

「チーム小網代」は小網代艇のオーナー、クルーメンバーの有志で編成し、現地で【PUFF(J105)】をチャーターした。

この遠征により、参加メンバー間、特にクルーメンバー、家族を含めた艇相互に協力し合う仲間意識が高まり、後のヨットクラブ設立の機運となつた。

《海上自衛隊の艦旗》

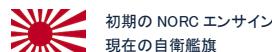
1945年の太平洋戦争の敗戦により、日本海軍は滅亡、戦後駐留して来た米英人たちが外洋ヨットを持ち込み、CCJ(Cruising Club of Japan)を設立し活動を開始、何名かの日本人もその仲間に入り外洋ヨットの技術、知識を学んだ。

その後、CCJのメンバーが本国引き上げに伴い、CCJを引き継ぐ形で1954年に任意団体の日本・オーシャン・レーシング・クラブ(NORC)を設立した。同時にNORCのエンサインとして、福永昭氏らクラブメンバーが終戦後使われなくなっていた旧日本海軍の軍艦旗をロイド(ロンドン)を拠点とする保険シンジケート、船舶全般の検査・登録機関)に登録し、クラブ艇の公式エンサインとして使用した。

軍艦旗はその優れたデザインのみならず日本海軍の興亡の歴史の象徴であり、このままなくなってしまうのは惜しいとの強い気持ちからであった。

後年、海上自衛隊が発足した際、その艦旗としたいので譲ってほしいとの要請があり、快くクラブ旗の登録を取り消して、海上自衛隊に譲り渡し、NORCはクラブバージを紹介の角に旭日を入れたデザインに変更、1964年に財団法人日本外洋帆走協会(NORC)になった後も引き続き使用された。

この様な経緯から旭日旗は海上自衛隊の艦旗として世界の海に翻つている。



《小網代ヨットクラブ所属艇》

2016年3月26日現在

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1. HATARI VI | (近藤禎之) |
| 2. くろしお | (千葉大学ヨット部) |
| 3. 桜工 | (日本大学理工系ヨット部) |
| 4. 未央 | (清水正一) |
| 5. アプサラス | (藤本達雄) |
| 6. サンゴ | (藤原博) |
| 7. DJAGATARA VI | (奥田丈二) |
| 8. NEPTUNE XII | (古屋静男) |
| 9. SALMON FOUR | (飯島征四郎) |
| 10. SAGAMI | (飯島要治) |
| 11. TILDE | (山本憲生) |
| 12. 仰秀 | (東京大学ヨット部) |
| 13. MAX | (横澤眞則) |
| 14. NADJA | (白崎謙太郎) |
| 15. KELONIA | (大谷正彦) |
| 16. Aube | (寺田保信) |
| 17. MOSSA | (吉田義明) |
| 18. 飛車角 | (名和秀幸) |
| 19. PHOENIX | (山本智章) |
| 20. KAMAKURA III | (平賀威) |
| 21. HURUTAKA | (渡辺好弘) |
| 22. 波勝 | (吉岡久光) |
| 23. はやとり | (野村政司) |
| 24. アレクサン德拉 | (姥名毅) |
| 25. ティイス・4 | (児玉萬平) |
| 26. アルファ | (長谷川孝男) |
| 27. 胡桃 | (氏家理央) |
| 28. IDEAL | (林康一) |
| 29. ABI | (高橋光威) |
| 30. OLIVIA | (永島栄一) |
| 31. PROUD MARY | (池永弘) |
| 32. ミスフィット | (高橋幸則) |
| 33. ハイスピリット | (佐藤忠美) |
| 34. ビクトリーII | (落合勝喜) |
| 35. SPIRIT OF TOKYO | (五十嵐紀子) |
| 36. BUJI KORE KIJIN | (石坂啓一) |
| 37. HATCHER | (馬渡健治) |
| 38. IXORA | (畠中洋二) |
| 39. Sun Beam 7 | (中村正三郎) |
| 40. YODELER | (氏家陸男) |
| 41. たかとり | (池内貞二) |
| 42. 多慶丸 | (渡部亨) |
| 43. CYNTHIA | (大柴芳雄) |
| 44. GULL | (栗津耕一) |
| 45. MONAMI WOO | (鵜原光幸) |
| 46. 衣笠 | (鈴木康之) |
| 47. アフロディーテ | (増田潔) |

注)カッコ内はオーナー或いは代表者名

《OB艇》

MUYA、WHITE CREST、月光、蒼龍、サーモンI、妙義、明日香、ドミンゴ
若王丸、HIRO、神州、どんがめ、竜王、矢矧、きんばち、一乗
バーミューダ、MONK、AURORA、幸

小網代ヨットクラブ

60年振り返って

(1955年~2015年)



2016年3月26日

小網代ヨットクラブ概史

《小網代湾、ヨット泊地としての始まり》

1952年にA.A.マッケンジー氏(退役イギリス予備海軍中佐、RORCのメンバー)が【MUYA】(33FT)を小網代湾にあった彼の別荘前に係留したのが小網代湾ヨット泊地の始まりである。3年後の1955年に福永昭氏の【古鷹】(20FT)、英国人ゲイン氏と米国人シーバー氏所有の【WHITE CREST】(21FT)が係留した。合わせて3艇となつたこの年を、後年小網代フリート(現在の小網代ヨットクラブ)の創立年とした。

以後1960年にかけて、フリート艇は【月光】【さがみ】【どんがめ】【ネブチーン】【サーモン】と徐々に増え、1964年に17艇、1969年には32艇になった。

《NORC 小網代フリート》

1954年、小網代の渡辺修治氏、福永昭氏らが中心となって任意団体の日本・オーシャン・レーシング・クラブ(NORC)が設立され、小網代フリートもその所属フリートとして活動した。

1964年に社団法人日本外洋帆走協会(NORC)が発足、上記各氏に加え、当フリートの古屋徳兵衛、飯島元次、富永弘の各氏もその中枢で活躍した。

《レースでの活躍》

初期の外洋ヨットレースでの小網代艇の活躍は目覚ましく、【どんがめIV～VII、天城】【さがみII】【サーモンII】【竜王丸、竜王、ふじ】【もさII、III】【飛車角】【チルデ】【くろしお】【波勝】【ハ丈】【ケロニアI、II】等が活躍、1965年の【香港・マニラレース】には【ふじ】が陳秀雄オーナー、渡辺修治艇長で当フリートとして初の海外レースに参戦した。時代は下がって1980年代には【一乗】がジャパンカップやミドルボート選手権で大いに気を吐いた。

《湾口防波堤の完成》

小網代湾は大きく西に開いていて、冬の北西の季節風が吹くと湾内に直接波浪が入って、大荒れとなりテンダーで艇までたどり着くのに苦労した。

1967年頃より湾口の防波堤工事が始まり、北岸から張り出した防波堤が出来上がり、泊地は北西の波浪からかなり守られるようになり、1968年9月シーポニアヨットハーバーがオープンした。

《泊地整備》

係留艇が増えるにつれ、係留の整備が必要となり1964年海底の縦横にワイヤーを敷設、1969年にはワイヤーに替え鉄筋丸棒を埋設し、各艇はそこから舫いを取る事とした。この作業を全員総出で行い、この作業を通じて、小網代の伝統になった業者に頼らない自主管理、共同作業の気風が養われた。



《初期の陸上の拠点》

湾奥の寺田倉庫の建物の一室を借りインフラ設備を設け、クラブハウス(初代)とした。また前庭に6mの高さの三角形の赤色灯標(夜間点灯)を設置、小網代湾への夜間入港に大いに役立った。

恒例の夏祭りも前庭で行われ、ささやかではあったが大いに活用され、陸上の拠点となった。

《オーナーズクラブの結成及びクラブハウスの完成》

小網代フリートの所属艇はNORCの加入が条件であったが、その後NORCに加入していない艇も次第に増えてきた為、数年に亘る話し合いを経て、1982年フリート艇とそれ以外の艇が合同し【小網代オーナーズクラブ】が設立された。

一方地元漁協との関係は、当初の対立の時代から粘り強い話し合いの期間を経て、徐々に協調関係に発展し、2006年6月、漁協の土地に本格的なクラブハウスの完成を見た。クラブ創立から半世紀を経て、念願のクラブハウスが完成した。

《小網代ヨットクラブ設立》

2006年クラブハウス開設を機に【小網代ヨットクラブ(KYC)】に名称変更、同時に構成員もオーナーだけのクラブからクルーもメンバーとなる開かれたヨットクラブとなった。この時点では艇数は50艇、所属会員は283名となった。

《係留の安全化》

泊地係留の安全化を目指し漁協の提案に基づき、それまで各艇が個別に打っていたアンカーを取りやめ、コンクリート製ケーソンと大型共同アンカー敷設を計画、2007年から漁協とクラブ員の共同作業により、2012年10月にすべての作業を終えた。

個別アンカー及び捨てアンカーの撤去も伴うことから、5年の期間を要したが、漁協関係者とクラブ員有志の労力奉仕の賜物である。

小網代ヨットクラブは、小網代湾に係留した3艇のヨットからスタートし、日本外洋帆走協会の小網代フリートを原点とし、日本の外洋帆走の基礎を築いた数々の先達を生み、又多くの優秀なオーシャンレーサーを輩出した日本のヨット界にあって最も古く伝統のあるクラブの一つである。

この60年間、環境の変化に伴い様々な問題、困難に直面した事もあったが、その時代時代のメンバー、そして多くの関係者の努力により2015年に創立60周年を迎える事が出来た。

この60年のクラブメンバー、関係者の皆様の努力に深く敬意を表すると共に感謝申し上げたい。

このたび創立60周年のパーティを開催するに当たり、ご出席の皆様方に当クラブの歴史を知って頂く為に、この葉を作成しました。